目　次

序論　流動しつつある漱石への評価
——漱石研究者が今、直面する課題 ……7
一. 問題提起 ……7
二. 漱石の先行研究史をめぐって ……9
三. 昭和 50 年代までの研究史から見た漱石像とその評価……13
(1) 漱石の生存中——文章のうまい通俗作家としての漱石像 …13
(2) 戦前・漱石の没後①——「則天去私」的漱石像の形成 ……15
(3) 戦前・漱石の没後②——主流としての「則天去私」的
漱石像対傍流としての生活者
の漱石像……16
(4) 戦後——暗い漱石像の定着 ……17
(5) 作品論が盛んに論じられた昭和 40、50 年代……19
四. 昭和 60 年代以後の漱石研究の分化……22
(1) 昭和 60 年代のテクスト論……22
(2) 語り手の問題 ……23
(3) フェミニズム批評及びジェンダー論 ……24
(4) コミュニケーション理論 ……25
(5) 90 年代「世紀末」論の流行……26
(6) 文学の危機と多岐にわたる漱石像の模索 ……27
(7) 21 世紀「読む」原理の探究——新しい作品論が
復活する兆し……28

(8) 漱石像の総検討……29
(9) 教科書から抹消された漱石……31
(10) 様々な研究視点 ……32
五. まとめと本書の課題……33
凡例 ……38

第一章　漱石における小説構成意識(1)
——『吾輩は猫である』の構成の謎 ……41
一. 問題提起……41
二. 寒月の縁談をめぐって見た『猫』の構成……43
三. 寒月と細君が一回しか会わなかった真意……44
(1) 「茶の間」と「座敷」との間——細君の行動
パターンの究明……44
(2) 寒月と細君が直接に話した内容について……49
四. 金田富子との縁談の話題に対面する寒月の仕草……52
(1) 寒月の「羽織の紐をひねくる」仕草の意味……52
(2) 寒月の「笑い」……54
五. まとめ……56

第二章　漱石における小説構成意識(2)
——『こゝろ』の語りのミステリー……59
一. 問題提起 ……59
二. 「笑い」の重み——「冗談」と「笑談」との差異 ……61

三. 「靜」の「笑い」――「心持ち薄赤い顔」と関連して…64
四. 「先生」の「笑い」――「椿の花」と関連して……66
五. 「K」の「笑い」――「御目出たう」と関連して……76
(1) 「K」が祝福の気持ちで「微笑」したとする場合……77
(2) 「K」の「微笑」への先生の解釈……81
(3) 「K」は単純に「微笑」をしたが、「K」を裏切った
「先生」が勝手にその意味を読み替えた場合 ……83
六. まとめ……84

第三章　主題を解く鍵としての宗近の人物像
――『虞美人草』の「金時計」と「結婚」の話題から …89
一. 問題提起……89
二. 「金時計」をめぐる結婚の話について……91
(1) 「金時計」と婚約に対する宗近と
藤尾母娘の認識の相反（第二、八章） ……94
(2) 小野の「金時計」に対する理解の相反（第二、四章）……96
(3) 宗近自身が語る「金時計」（第三、十、十六章）……101
(4) 藤尾と「金時計」（第六、十二、十五章）……108
(5) クライマックスでの「金時計」（第十七、十八章）……112
三. 「金時計」をめぐる人物の対比 ……118
四. まとめ ……122

第四章　『門』の宗助夫婦の関係の構図
——「子供」と「屏風売却」の二つの話題から …125
一. 問題提起……125
二. 宗助夫婦の応答場面に見られる二人の会話の特徴……126
(1)「子供」の話題になる場合——積極的宗助と拒否的御米…128
(2)「屏風売却」の話題になる場合——消極的宗助と
積極的御米……134
三. まとめ……137

第五章　『道草』論を振り返って
——健三のもう一つの対人関係への照射 ……141
一. 問題提起……141
二. 『道草』論の成果……142
三. 『道草』論の諸問題点……144
(1)テキストあるいは原文を論に従って読み替える問題……145
(2)語り手の抱える問題……148
(3)読みの視点の限定という問題……153
四. 『道草』に描かれた健三の「友達」(友人)……155
五. 健三のもう一つの対人関係——「友達」(友人)との交際…162
六. まとめ……169

第六章　健三にとっての「母なるもの」
——『道草』に隠蔽された漱石の心境 ……173

一. 問題提起 ……173
二. 『道草』から見える健三の生い立ち ……174
三. ユングの「母なるもの」(グレートマザー) ……183
四. 健三と御常との親子関係 ……185
五. 『道草』から消えた二人の女性――「母なるもの」の隠蔽……189
(1) 実母に関して ……190
(2) 二番目の嫂に関して ……197
六. まとめ ……204

第七章　夏目漱石の描く男女関係の記号論的世界――『それから』の「指輪」と「時計」 …207
一. 問題提起 ……207
二. 漱石文学に見られる「指輪」 ……209
三. 漱石文学に見られる「時計」 ……213
四. 明治社会での「指輪」と「時計」 ……215
五. 漱石の作品における「指輪」の意味 ……223
(1) 成り金の風潮の反映 ……223
(2) 愛のしるし ……224
(3) 愛のライバル関係にいる人物の比較 ……224
(4) 理想的な結婚相手 ……227
六. 代助の「指輪」に対する平岡の考え方 ……227
七. まとめ ……233

第八章　夏目漱石の小説を「銀行(員)」の記号論的視点で読む
——ヒロインの結婚話と関連して　……239
一. 問題提起 ……239
二. ヒロインの結婚の謎解き ……241
(1)『草枕』の那美の場合 ……241
(2)『三四郎』の美禰子の場合 ……245
(3)『それから』の三千代の場合 ……253
三. 漱石の他の小説に登場する「銀行(員)」 ……259
四. 明治社会における「銀行員」の社会的文脈 ……270
(1)明治社会における「銀行員」 ……270
(2)収入の面から見た「銀行員」 ……275
五. まとめ ……280

結論とあとがきに代えて……283

初出誌一覧……295
テキスト……297
引用及び参考文献一覧……297